

国際シンポジウム

ドイツ・モダニズムの黎明期とベルリン

20世紀初期にベルリンで開花したドイツ・モダニズムの歴史的展開を再検討する国際シンポジウムです。ドイツ近代美術の擁護と発展のため、ベルリンの旧国立美術館で「ドイツ美術の100年展」が1906年に開催されますが、フランス近代美術との競合、ナショナリズムとの葛藤のなかで、館長のフーゴ・フォン・チューディ、画家のマックス・リーパーマン、そして美術史家のユリウス・マイアー＝グレーフェ等の協力によって企画された国家的事業でした。この画期的な美術展を実現させた大都市ベルリンに目を向け、美術館、美術・工芸・建築、理論、パトロンやコレクターの貢献等から、ドイツ独特のモダニズムを考えます。

午前の部 10:30~12:15

- 開会・テーマ概要 仲間裕子（立命館大学教授）
 - 高橋秀寿（立命館大学教授）
 - 池田祐子（京都国立近代美術館学芸課長）
 - 三木順子（京都工芸繊維大学准教授）
- 皇帝のいる風景—世紀転換期の帝都ベルリンと国民表象
ベルリン工芸博物館と日本—東洋美術館設立をめぐる
「一般的 allgemein」なるものの位相—芸術学のモダニティ

午後の部 13:30~16:45

- ラルフ・グライス（ベルリン、旧国立美術館館長）
 - ペトラ・クールマン＝ホディック（ドレスデン、国立美術館版画素描館シニアキュレーター）
 - 仲間裕子（立命館大学教授）
 - フーゴ・フォン・チューディのモダニズムと日本
- ベルリンとパリにおける印象派の美術館化。チューディの印象派作品獲得と
‘カイユボットによる寄贈’の背景について
モダニティへのパースペクティヴの転換—ベルリンの「100年展」（1906）における

(休憩)

- 尾関幸（東京学芸大学教授）
- 佐藤直樹（東京藝術大学准教授）
- アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデと
ドイツ—ベルギーから来たモダニズムの預言者

ディスカッション 16:45~17:30

- 総合司会：竹中悠美（立命館大学）

日付：2019年5月25日（土）

時間：10時30分～17時30分

場所：立命館大学創思館カンファレンスルーム

定員：100名

同時通訳付（独語・日本語）

主催：科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号 17K02302）「ドイツ・モダニズムの黎明期—作品・理論・パトロンの美学・歴史研究」
共催：立命館大学国際言語文化研究所・研究所重点プログラム「風景・空間の表象、記憶、歴史」

プロフィール 登壇者

ラルフ・グライス Ralph Gleis

ミュンスター大学、ケルン大学、ボローニャ大学で美術史を専攻。2009 年から 2017 年までウィーン美術館の学芸員を務め、現在はベルリン旧国立美術館館長。研究と展覧会企画は 19 世紀の西洋美術に重点が置かれ、「ピーダーマイヤー時代の美術」(2009)、「ハンス・マカルトー都市を支配した画家」(2011)、「ロダンーリルケー・ホフマンシュタール：人間とその創造力」(2017)、「ギュスターヴ・カイユボットー印象派の画家、そしてパトロン」(2019)



ペトラ・クールマン＝ホディック Petra Kuhlmann-Hodick

マールブルク大学、ボン大学で美術史を専攻。1993 年以降ドレスデン国立美術館版画素描館に勤務し、現在はシニアキュレーターとして、19 世紀のドイツや西洋美術、またアジア美術に関する研究調査とを実施し、「オーギュスト・ロダン」、「カール・グスタフ・カールス」、「浮世絵」展等を開催した。近年は「ロマン主義の風景画、ダールとフリードリヒ」(2015)、「ドレスデンのケーテ・コルヴィッツ」(2017/18) 展他。

高橋秀寿

ドイツ現代史

『時間／空間の戦後ドイツ史——いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』(ミネルヴァ書房、2018)；『ホロコーストと戦後ドイツ』(岩波書店、2017)；『ポピュラー・カルチャーにおける破局の風景——日独比較』(『立命館言語文化研究』29 巻 4 号、2018)

池田祐子

ドイツ語圏の近代美術・デザイン史
「ドイツの工芸博物館について：その成立と展開——ベルリンを中心に」『近代工芸運動とデザイン史』思文閣出版、2008；編著『ウィーン：総合芸術に宿る夢』(竹林舎、2016)；『京都国立近代美術館所蔵 世紀末ウィーンのグラフィック』展図録、(京都国立近代美術館、2019)

三木順子

近現代の形象論、美学・芸術学
『形象という経験』(勁草書房、2002)；「不可視の都市風景——現代都市と現代文学における「日常空間」」(『立命館言語文化研究』29 巻 4 号、2018)；「素描と身振り——形象の「動力因」を求めて」(形象論研究会『形象』vol.2、2017)

仲間裕子

近現代ドイツ美術、風景論

「自然を発見する？——ロマン主義的表象の再考」(『思想』、岩波書店、2009)；Caspar David Friedrich und die Romantische Tradition, Moderne des Sehens und Denkens (Reimer Verlag, 2011)；共編著『自然の知覚——風景の構築。グローバル・パースペクティヴ』(三元社、2014)

尾関幸

ドイツ語圏の美術 (18、19 世紀)
編著『ベルリン——砂上のメトロポール』(竹林舎、2015)；共著『近代美術の誕生——ロマン派から印象派へ』(中央公論新社、2017)；「思い描かれた中世——ナザレ派の芸術観」『前ラファエッロ主義：過去による 19 世紀絵画の革新』(三元社、2018)

佐藤直樹

ドイツ美術、北欧美術
編著『ヘレン・シャルフベッカー魂のまなざし』(求龍堂、2015)；「ナザレ派におけるラファエッロとデューラー——プフォルからコルネリウスへ」『前ラファエッロ主義——過去による 19 世紀絵画の革新』(三元社、2018)；編著『ドイツ近代芸術におけるディレクタンティズム』(三元社、2019 予定)

司会

竹中悠美

近現代美術、視覚文化論

『美学と現代美術の距離』(東信堂、2004)；「近現代美術——芸術家サークルから、EU の文化都市へ」『ルクセンブルクを知るための 50 章』(明石書店、2018)；「ドキュメンタリー写真における『貧困の美学』——ドロシア・ラングの FSA 写真を中心に——」『カルチャーミックス 2』(晃洋書房、2018)

MAP

